
ビーポジェネラル

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビー・ボ・ジ・ュ・ネ・ラ・ル

【ZPDF】

N1855S

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

ビックリワールドのスピンオフついに誕生！全51話。

第一話 喪険開幕

X - B I V O 達がビットワールドに襲来した。

ベリーと校長は、必死に追つ払っていた。

「じいちゃん、こいつ等いくら攻撃しても数が多すぎてたちつりできねえぞ。」

「もうじやの。」

X - B I V O が、私立パイレーツ学校の一部を破壊した。

「わしの学校を良くも。」

しかし、数が多くて太刀打ちがうまくいかない。

ブックブック人のマイランドにもX - B I V O の襲来が現れた。

「ここは、危険だ。逃げろー！」

ブックブック人は、争いが好きではないため、武器を持っていない。

X - B I V O に襲われたブックブック人の青年は、ビー・ボランリーをジャッキー・ホールに落としてしまった。

「ああ！」

ビー・ボランリーは、人間界に落ちて行ったのである。

人間界では、『』く普通の暮らしをしていた。

「梅也、今日『』に行く？せつかくの夏休みを無駄にできないから
ね。」

「行く場所は考えていないな。晴戸はどうなの？」

「俺も、あんまし考えていないな。」

琳紗と合流した。

「私も行く場所考えてないの。」

その三人の前に、ビー・ボランリーが落ちていた。

「なにこれ？」

「なんだか見たことも無い物だね。」

スイッチが突然入り、画面からビー・ボが現れた。

「わっ、怪物が出てきた！」

「違うよ。僕たちはビー・ボ。ビットワールドの生命体だよ。」

「ビットワールド？それってどんな世界なの？」

琳紗が言った。

「ビットワールドを知らないのか。ということは人間界の者たちなの？」

「わけがわからないけど、ビットワールドのことを教えてくれ！」

晴戸は、エストに「ビーボにビットワールドのことを教えてくれた。

「ビットワールドというのは、いろんなビットモンやビット人などが暮らしている世界なんだ。しかし、ジャッキーによつて世界は食い荒らされてそこに誕生したのがジャッキーホールというわけ。ビットワールドと人間界は、ジャッキーホールのあるせいでつながってしまったんだ。」

「へえー分かつたよ。ビットワールドのことが。」

「えつ本当ー！」

「でも、ビットワールドに行く気がしないなー。」

「ちえつ、せつかく教えてやつたのに面白くないの。」

ブイツとした表情を見た晴戸は少しあわてながら言った。

「じめん、じめん。行く気はあるけど。」

一方、ビットワールドでは・・・

X-BIVIOは、7つの蒼いクリスタルを持っていた。

「此の七つの蒼いクリスタルから、ビー・ボのデータのある者に食わせよう。貢物の代わりにな。」

「はつ！」

「ケルベロス1調子はどうだ。」

「X-BIVOの行動力と攻撃力が上がっている。しかし防御力をあげるほうもいいと思う。」

その頃、人間界では・・・

X-BIVOの5体が、人間界にやってきた。

晴戸は、エストと一緒になり、梅也は、カチキランと一緒になり、琳紗は、ヒマワリンと一緒になった。

X-BIVOは、人間界の公園を破壊し始めていた。

晴戸たちは、急いで向かった。

「何だ、ビー・ボなのか？」

「違う晴戸、あれはビー・ボではない。」

X-BIVOは、晴戸達を見た。

「Jつちを見てるぞ！」

「俺達に任してくれ！」

エスト達が、リアライズした。

「ポットファイヤー！」

「勝伝！」

「種ボンバー・マシンガン！」

X-BIVOは、行動力が早かつた。

「何つ行動力が早い！」

X-BIVO達は、エストを攻撃しまくった。

「エスト、大丈夫か。」

「平氣だ。こんなの、俺達の力が弱いわけではない！」

しかし、石モグラとノリマキトカゲがX-BIVOの標的にされてしまった。

「まずいっ助けなくては。」

第一話 喪失記（後書き）

次回 第二話 覚醒始動。お楽しみに！

第一話 覚醒始動

X - BIVOが、ノリマキトカゲと石モグラに襲いかかろうとしていた。

「石モグラ、此処は僕が止める。先に逃げてくれ。」

「でも、ノリマキトカゲ・・・」

「良いから行け！」

「分かった。」

「ノリマキシユート！」

ノリマキトカゲの攻撃がX - BIVOに命中した。

エストとカチキランとヒマワリンは、X - BIVOを攻撃し始めた。

X - BIVOを包んでいた黒い霧が消えた。

X - BIVOの姿は、ニンジンに待針の針が串刺しになつていていた。

「何だ、あの姿は。」

ビー・ボランリーが突然光り始めた。

「此の光は、何だろ？。」

「エスト覚醒実行！覚醒完了エスト2！」

「カチキラン覚醒実行！覚醒完了カチキラン2！」

「ヒマワリン覚醒実行！覚醒完了ヒマワリン2！」

X-BIVOは、ノリマキトカゲに攻撃しようとしたがエスト2たちに止められた。

「助けてくれてありがとう。」

「はやく、石モグラの所に行ってくれ！」

「うん、分かった。」

X-BIVO5体はエスト2たちに攻撃を仕掛けた。

「針を飛ばして来ただぞ！」

「エターナルブラスト！」

「勝利のラッシュ！」

「小さき花の吹雪！」

X-BIVOの攻撃を跳ね返して、5体のX-BIVOを倒した。

「やったー！」

3人は喜んだ。

3体のビー・ボは、元の姿に戻った。

「すげえーぜ！あのカッコよさ。」

「もう一度見てみたいな。」

ビー・ボは、エヴォリューションではなく、*Arrousal*である。

一方・・・

「人間界リアルワールドで、X-BIVO5体が覚醒したビー・ボに殲滅されただと
！んなつ馬鹿な。」

「本当らしいです。X-BIVOをアップグレードしなければなり
ません。」

「そうだな。」

人間界・・・

「もしかしたら、人間界のビー・ボが狙われるかもしれないからビッ
トワールドは、まだ行かないことにするよ。」

エスト達は、そう決意した。

X-BIVOが人間界に降り立っていた。

その姿は、黒い姿のアイスロックと黒い姿のトロピカルドックと黒

い姿のおぢやワンがいた。

ビー・ボ・ジョ・ネラルノ

X - B I V O の名前と姿を大募集。

その X - B I V O がどんな姿をしていてどんな名前なのかを寄せて、
感想ページに書いてくれ！

3 体の X - B I V O は、 1 体のビー・ボを連れさうつた。

一体のビー・ボそれは、 電ワンコだった。

第一話 覚醒始動（後書き）

次回 第二話 電ワソコを救え！。お楽しみに！

第三話 電ワンコを救え！

三体のX - BI\VOは、ジャーケ族の一人に電ワンコを渡した。

「いいぞ、三体のかわいいX - BI\VOよ。」

「ありがとうございます。」

「しかし、電ワンコは、人質にする。」

「選ばれた者を呼び出すためにですか？」

「その通りだ。X - BI\VOの諸君。」

三体のX - BI\VOは、しばらく待機することにした。

3人は、ビーボランリーの警告音に目が覚めて、急いでその場所へと向かった。

晴\達は、艦の中にいる電ワンコを見つけた。

「よつよつ、我があもしろき場所へ。」

すると3体のX - BI\VOがひとつになった。

「これが、合体したビーボの姿だ。」

その姿は鎧武者の姿のようであった。

エスト達をリアライズさせた晴戸達は、ビーボを急いで覚醒させた。

「エスト覚醒！覚醒完了エスト2！」

「力チキラン覚醒！覚醒完了力チキラン2！」

「ヒマワリン覚醒！覚醒完了ヒマワリン2！」

合体されたビーボは、口から炎をはいて襲い掛かった。

「エターナルブラスト！」

「勝利のバースティング！」

「ジャイアントフラワーグランデソウビ
巨大花咲鑿怒薔薇」

この三つの攻撃が合体ビーボに命中した。

ジャーグ族の一人は逃走した。

晴戸達は、エスト達とともにジャーグ族を追いかけた。

第三話 電ワノンを救え！（後書き）

次回 第四話 衝撃のX-BIVO。お楽しみに！

第四話 衝撃のX - BIVO

晴戸達は、ジャーケ族の一人を必死に追いかけた。

ジャーケ族は、一人の人間に出会った。

「馬鹿がお前は。」

「あつ、いたぞ！」

「二人もいる。誰だお前等！」

その少年は、笑った。

「ははは、ガキども。俺の名は、矢間郡鉄だ。」

「矢間郡鉄、X - BIVOを使うのはやめろ！」

エストの言葉に、郡鉄は無言だった。

ジャーケ族の一人、トウラインダンは、X - BIVOを召喚した。

「X - BIVOよ。ガキどもを倒せ。」

「ネクロテイル！」

三人と三体は、吹き飛ばされた。

「あいつ、攻撃しやがったな！」

晴戸は、X - BIVを蹴散らす方法を考えていた。

「晴戸、何かいい考え方思いついたのか。」

「いま、考えているところだよ。」

「何だよ。」

「力チキラン2攻撃を。」

「おう！勝利のバスター・ツップ！」

X - BIVは、いつたんひるんだのだが、再び立ち上がった。

「あつ、ここつ立ち上がりが早い。」

第四話 衝撃のX-BIVO（後書き）

次回 第五話 エスト新たなる覚醒。お楽しみに！

第五話　Hスト新たなる覚醒

「立ち上がりが早い。」

晴戸と琳紗は、少し困っていた。

Hストとヒマワリンは、後ろから攻めることにした。

「食らえ！　Hターナルブラスト！」

「巨大花台風金剛塵！」

X-BIVOに大ダメージが『えられたと思ったのだが・・・

「やつたか・・・なに？」

トウラインドンは晴戸達に言つた。

「此のX-BIVOの名は、メルトサイン。どんな攻撃も溶かしてしまいます。」

「だから、攻撃を食らつても溶かしてしまつから無傷なのか。」

「なら、攻撃力を5倍にして連続撃ちにするんだ。」

「おつ！　」

三体のビーボが出力を上げた攻撃をメルトサインに連続撃ちにした。

「これで倒れるはず。」

しかし、メルトサインは無事だった。

「これでは勝てない。」

「殺れ、メルトサイン！」

「ネクロテイル出力10倍！」

三体のビーボは、襲われて動けにくい状態になつた。

「エストー！」「カチキラン！」「ヒマワリーン！」

「さあ、結晶に変えてしまえ！」

「メルトサイクルインパクト！」

ビーボランリーが突然光つた。

「エスト2覚醒！」「エスト3覚醒完了！」

エスト3は、メルトサイクルインパクトを打ち消した。

「何だと…」

「「Jつちの番だ！ソウルビックハリケーン！」

メルトサインは、結晶になつてしまつた。

「さらばだ。」

ジャーケ族の一人は、何処かへと行ってしまった。

ビットワールドでは、一つの帝国が作られていた。

「ふふふ、ビットワールドは我々の者だ。」

つづく

第五話　ヒスト新たなる覚醒（後書き）

次回　第六話　ビットワールドに聳え立つた帝国。お楽しみに！

第六話 ビットワールドに聳え立つた帝国

レー・ガと矢間は、トウ・ラインダンを待っていた。

「待ちくたびれたぞ！」

「すまない、メルト・サインがやられたからさ。」

矢間は、ビットワールドに存在する1000個のマイランドを一気に支配する帝国「ダークビット帝国」を創設させていた。

矢間とレー・ガは、ビットワールドをかつてない危機に陥れた八大不思議についてを調べていた。

「八大不思議について何かわかつたか？」

「まだ分からない。しかしそう最近ジャッキホールがビットワールドと人間界の時空の波長が合わない状況が続いている。」

「ということは八大不思議の一つが暴れたことどころなったということか。」

ダークビット帝国には、1000のマイランドを10個に分けた地域にした。

人間界では・・・

セイイドー達がビットワールドに行くことを決めた。

「ビットワールドに何が起きているのかが気になる。」

「やうだな。」のままでは恐ろしいことが起きるぞ。」

ソウメ達も行くことを決めた。

「それじゃビットワールドにレッシアクセスー。」

六人は、ビットワールドに行くことにした。

ビットワールドで待ち受けている謎に挑むためである。

「つにに来たな。」

第六話 ルシトワールドに聳え立つた帝国（後書き）

次回 第七話 マイケンハンドの甘こ麗、謎の甘党ジー・ボ。お楽しみに！

第七話 マイラングの甘い罠、謎の甘党ヒーロ

「ビッグトワールドに訪れたセイドー達。

「此処がビッグトワールドか。」

「しかし、様子がおかしい。」

エストが、驚いた表情で見ていた。

「セイドー、あれを見て。」

「ビッグトワールドのあの廻殿は。」

「今までなかつたよ。しかもあそこから暗黒エネルギーを感じる。」
ビッグトワールドの状態は、いつも状況である。

暗黒の紫の雲がビッグトワールド全体に覆われておつ、ヒーローたち
金色の光が見えるが罠の信号である。

そして、更に1000にも及ぶマイラング100個ずつに分けて100の地域を作つた。

彼等がいる場所は、そのマイラングの一つである。

地名、甘党のX-BIVOが指揮を務める場所。

「この地域にX-BIVOの存在がいるのか。」

そこに疲れている田玉子がいた。

「おい、大丈夫か。田玉子！」

「Hスト、X・BIV〇の大群が僕達を攫つて行った。助けてくだ
れ！」

田玉子は走りつかれて氣を失つてしまつた。

ソウメは言つた。

「セイドー、リーサ。聞いたか。」

「ああ、許せねえ！」

「そつよ、いきなり大群で襲つて攫うなんて酷い奴らだわ。」

「俺達で、X・BIV〇を倒すぞ！」

「ぼく」「ぐどんがエスト達を見つけて言つてあげた。

「X・BIV〇の大群が城の中にはいます。」

「IJの城も前はなかつた。」

「それにしても、変だよ。甘党ビー・ボの正体突き止めなければな。」

「ああ、そうだ。」

甘党のビー・ボの正体それは、マーガ・レレレーラというX - B I V Oであった。

第七話 マイランペの甘い罠、謎の甘党ジーク（後編）

次回 第八話 レレレーラの攻撃態勢、倒して見せる力チキラン
！。お楽しみに！

だんだん、展開が怪しくなってきたのは、甘党ジークが原因です。

第八話 レレレーアの攻撃態勢、倒して見せるカチキラン3！

田玉子に案内されたセイドー達は、驚く場面を田撃した。

「まずい、お前等が作ったもの甘くもない。よつて死を持って。アルファスオールリストイー！」

田玉子や料理系ビーボが結晶になってしまった。

「なんて酷い」としゃがるんだ。」

エストの怒りは、カチキランにも届いた。

「俺もだ。こんな奴がビットワールドの一部支配しているのが許せない！」

「ビットワールドは、みんなの世界だ。だろつセイドー！」

「ああ、そうだよ。エスト行くか。」

「カチキランも行くか。」

「おうつー。」

「エスト覚醒ー。」「エスト2覚醒完了ー。」

「カチキラン覚醒ー。」「カチキラン2覚醒完了ー。」

ヒマワリンは、料理系ビーボ達の救出作戦に入った。

レレレーアは、2体のビーボを見た。

「覚悟しろ！」

「下らん。お前等も消去してやる。」

エストの攻撃がレレレーアに命中した。

「無礼者め死ね！アルファスオールリストイー！」

「くつ、ああああ！」

「エスト2！」

「此処は俺に任せろ！」

カチキラン²とソウメの目が燃えていた。

「グラードランチ！」

「効かぬ！グラントイスクイノセン！」

「負けるわけにはいかない。カチキラン行くぞ！」

「ああ、燃えてきた闘志を絶やすわけにはいかない！」

「よしつ！カチキラン覚醒！」「カチキラン³覚醒完了！」

「なにつ！」

「」つちも行くぞエスト。」「オッケー！」

「ヒミツ/2 覚醒!!」、「ヒミツ/3 覚醒亮了!!」

卷之三

「最後の甘き攻撃！」

3 形態のビーボには、通用しなかつた。

「何だと！」

「勝利列島拳！」　バーングツワー・シャワー！」

レレレーーは、攻撃を受けて大爆発した。

「やった！」

「でも救出完了したよ」

サンキュー ヒロシュネル

レレレ！アは結婚になつた後、消滅した。

その直後、次の場所への扉が開いた。

「次に待ち構えている相手と戦うことになるのか。」

「絶対ビジットワールドを救つてやる此の悪の手から。」

第八話 レレレーアの攻撃態勢、倒して見せるカチキラン3！（後書き）

次回 第九話 第二のヒリア、危険迫る怪しき存在。お楽しみに！
次回ヒマワリンが3形態に覚醒します。懐かしきバグリンが舞い上がるヒリアでどんな戦いが繰り広げられるか。

第九話 第一のヒリア、危険迫る隠しき存在

ビー・ボジエネラルそれは、人間とビー・ボがパートナーになり、共に戦い、共に暮らしていく選ばれし者達のことである。

セイドー達は、何かを確認しに行つていた。

「エスト、何かわかつた。」

「バグリンの死骸を見つけた。」

バグリンのデータの残骸が、そこいら中に散らばっていた。

「敵軍の奴、とても強く強い奴だらう。」

「そうだな。確かに強さを感じる。」

その時、何者かがセイドー達に近付いていた。

セイドー達は、何やら黒き者を見た。

「誰だ?」

「第一のヒリアの副隊長、ゴイサノヴァンタンである。」

第九話 第一のヒリア、危険迫る怪しき存在（後書き）

次回 第十話 美しき花の力、ヒマワリン³。お楽しみに！

第十話 美しき花の力、ヒマワリン3

「お前達は、此処で何をしている。」

「なにって、お前を倒しに来た。X-BIVOはなぜ生まれた。」

「エストが「ゴイサイノヴァンタン」に問い合わせた。

「ふん、そんなものは教えない！」

「だつたら、叩きこんで教える行くぞセイドー！」

「よし!!」

「うん!!」

「エスト覚醒！」 「エスト3覚醒完了！」

「カチキラン覚醒！」 「カチキラン3覚醒完了！」

「直接突破戦式！」 「グラティスバスター！」

「スピードアイアスハードファイア！」

3つの技が相殺した。

「うなれば私も！」

「ヒマワリン覚醒！」 「ヒマワリン3覚醒完了！」

「スリー アウトイースト！」

『ゴイサイノヴァンタンは避けた。

「お前らなどの攻撃は甘い！カガーゼボットー！」

エスト3とカチキラン3が吹き飛ばされた。

「負けるか。勝利絶対浄化拳！」

第十話 美しき花の力、ヒマワリン3（後書き）

次回 第十一話 バグリンと融合！危機訪れた時の力。お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1855s/>

ビーポジェネラル

2011年11月2日19時12分発行